

国際研究集会——日本近代文学のインターフェイス—— 発表要旨

二月一日(日)午前二〇時より 於 日本大学文学部

第一会場(三二〇四教室)

【個人発表】

午前の部

明治二〇年前後の小説における
メタレプシス
——その役割と文学史上の位置づけ

ニコラ・モラー

どんな物語も、一種のコミュニケーション行為として考えたとき、そこには「語りの水準」が少なくとも二つ並存している。すなわち、語り手・聞き手が位置している世界と物語世界である。この水準が境界侵犯される現象をジェラール・ジエネットは「メタレプシス」と呼んだ。それは、芸術表象にかかわる侵犯行為であり、時代、芸術思潮などによって、拒否されたり、許容されたり、または敢え

て求められたりもする。

ところで、明治二〇年前後の作品に頻繁に現れる、作者や語り手によるメタ物語レベルの発話は、江戸戯作の語りを引きずった過渡的な現象として、近代写実主義にそむく過ぎ去った時代の名残と消極的に解釈される傾向が伺える。しかし、写実主義の嚆矢とされるバルザック小説にも見られるメタレプシスは必ずしも前・反近代的な文芸意識を表すものとは言い切れない。そこで、日本近代小説表現史研究からヒントを得て、西洋物語論と照らし合わせながら、明治小説のメタレプシスの再評価に挑みたいと思う。

「敗者の美学」としての

ドーデを読む

山根 祥子

日本におけるアルフォンス・ドーデの移入に関する研究は富田仁による緻密な先行研究があるが、ドーデがなぜ明治・大正期の作家たちに好まれたかという点に関してはまだ言及する余地があるように思われる。本発表はドーデの失われたあるいは失われてゆくものへのノスタルジーを描いた物語を「敗者」の物語と捉え、日本人のイデオロギー的側面からドーデのテクストを読むという試みである。当時の文壇におけるドーデ像にも触れながら比較的ドーデがよく読まれていた時代と言える明治後期から大正期を中心に日本におけるドーデを論じていきたいと思う。

透谷における「鏡」

楊 穎

明治二六年一月、透谷は「宿魂鏡」を『国民之友』に発表した。発表当時、島

崎藤村、田山花袋、正宗白鳥らの目を惹き、特に、正宗白鳥の「不思議な小説」という批評は「宿魂鏡」の代表的な評価になっている。「不思議」とは「突然」「怪しき古鏡」が出て来て」「勝本清一郎『透谷全集』『解題』」いることを指しているだろう。平岡敏夫も「明らかなこの透谷独自の方法を可能にしたのは△幻鏡▽という装置で」とあると指摘している。

先行研究では△幻鏡▽という装置の由来を藤村が抄訳した清朝の人情小説『紅樓夢』第十二回から着想を得たと指摘し、さらに森槐南が訳した『紅樓夢』第一回に關わっているとの指摘もある。実は、「鏡」という字は「宿魂鏡」に初めて出現したのではなく、二年前の「蓬萊曲」を始めとし、その後の詩や評論には何回も出ているモチーフである。透谷にとって「鏡」は一体何を意味するか、その「鏡」の由来は本当に『紅樓夢』にとどまっているかについて、検討したい。

樋口一葉の作品における

ジェンダー観の変遷

——物語論・言語行為論の視点から

笹川 洋子

「花ごもり」以降の一葉の作品群を、語りの視点、作中人物の言語行為から分析し、三つの作品群に分けることで、ジェンダー観の変遷をみる。第一の「言語行為により隠喩的にジェンダーの問題を描いた作品」には「花ごもり」「やみ夜」「たけくらべ」がある。伝統的なジェンダーの描き方では、受身的な女性と動作主としての男性が作品に登場するが、作中人物の発話行為は、別のジェンダーの構図を示す。第二の「ジェンダーの問題に葛藤する女性を描いた作品」には「大つごもり」「軒もる月」「にじりえ」「十三夜」が含まれる。ここで、一葉は女性、男性という領域を超え、社会的弱者の問題としてジェンダーをとらえる。第三の「身体的に行動するジェンダーとしての

女性を描いた作品」には「わかれ道」「裏紫」「われから」がある。一葉は、これまでの隠喩的表現技法を超え、女性たちを男性のように行動させることで、物語の表舞台にジェンダーの問題をあげる。

明治新俳句における映画性

——子規と非焦点的(界面現象)の美学

坂口 周

本発表は、一八九六年以降の正岡子規の俳句批評の分析を通して、そこに潜む映画的美学を抽出する。その上で、世界先進の芸術に対抗しうる日本独自の「近代文学」の創造という時代の課題にたいして、俳句の存在が果たした役割を再考したい。日本で初めて映画が上映された一八九六年から大正期の「純粹映画運動」までは、「活動写真」は理論的にも上映スタイルの点でも未成熟であり、文学者達は静止した絵画の鑑賞を好んだ。しか

し、新たに掲げられた「写生」という視覚的感性には、空間の運動化ともいうべき「活動」の問題があらかじめ組み込まれていた。子規の俳論は、〈焦点〉と〈焦点〉の間にのみ宿る美をコンティニユイティとして捉え、その領域に生じる〈界面現象〉の意味生成に新俳句の動力学を見出している。本発表は、やがて漱石によって洗練されていくことになる、イメージの識閥下の〈推移〉に基づく文学理論を、子規の先駆的議論を通して考察する。

午後の部

夏目漱石『文学論』の位相

——同時代における英語圏の文学理論
・芸術論との比較・対照から

木戸浦 豊和

夏目漱石『文学論』（大倉書店、一九〇七）は、両義的な評価に曝されてきたテキストである。『文学論』は、漱石の

内面を忠実に照らし出すテキストとして「序」の意義が強調され、文学理論としての内実は顧みられない傾向が未だ強くある一方で、構造主義や記号論などの現代的な批評との類縁性が指摘されるなど、文学理論としての先駆性を高く評価する見解もまた存在する。しかし、このような両極的な評価がこれまで共に看過してきたのは、同時代において『文学論』が占める文学理論としての位相ではないだろうか。本発表は、一九世紀後半から二〇世紀初頭の文学論や芸術論との比較・対照によって、『文学論』の持つ固有性と通有性とを明らかにすることを課題とする。特に英語圏における共時的な文学論・芸術論を参照することによって、作者（芸術家）と読者（鑑賞者）との関係性という観点から『文学論』の議論を捉え直すことを試みたい。

不機嫌という気分と解釈共同体

——『夢十夜』『道草』と

『結婚狂詩曲』を中心に

張 芸

文学作品は、一旦書き終えて発表されたら、それ以降成長したり変化したりすることはないのであるか。変貌を止めない時代の潮流の中で、発表される時代に定着された文学作品は、どのような形でどうやって時空を超越し読者を感じさせるのか。特定な時代に生きている作者は、特定な時代に書かれた作品と後世の不特定な時代に生きている読者との間でのような役割を果たしているのか。その役割は、作者自身が計算に入れたりコントロールしたりすることができるのであろうか。又、その事情は国によってそれぞれ違うのであろうか。こうした問題を、漱石の『道草』『夢十夜』と錢鐘書の『結婚狂詩曲』という、大きな隔たりのあるように見える日本と中国の三つの

作品の探求を通して、明らかにしたいと思う。

「自己本位」の言語観

——谷崎潤一郎『文章読本』と
李泰俊『文章講話』

李 漢正

夏目漱石が西洋文化の抑圧から脱して日本文化の精神的独立を説いた「自己本位」の思想。一九三四年に刊行された谷崎潤一郎の『文章読本』における「日本語」の認識のなかで展開されている「自己本位」の言語観は、一九四〇年に植民地朝鮮で発行された李泰俊の『文章講話』にも見られる。本発表では両テキストの成立の背景を検討しつつ、そのなかで表れている「母国語」についての言語観がどのようなものであったかを考える。それは他言語とどのような関わりで発せられているのか。近代という時代における言語をめぐる危機感がもたらした言語観

を「自己本位」の思想に照らし合わせて探る。それを通して文化と言語、現代と古典との関係が近代性の獲得という文学的営みにどのように問題視されているのかを明らかにする。

〈媒体〉の源泉Ⅱ典拠

——谷崎潤一郎「呪はれた戯曲」
をめぐって

福岡 大祐

《インターフェイス》の物質性に着目する本発表では、谷崎潤一郎『呪はれた戯曲』（中央公論一九一九・五）を検証した。〈媒体〉の人たる谷崎にとっての本篇の意義を「引用」の観点から再整理することがその目的である。

時間、場所、ジャンル、とカテゴリーを異にする材料を自由に接続し往還する、語りのイレギュラーな挙措が本篇の特性だ。その諸場面が、位相差を有する引用文のコピーとそのペーストで形成さ

れる、引用の過剰なふるまいに着目すれば、作家にとってのテキストの質料性への直面と、間テキスト的連続性の確保のレッスンという側面を、本篇は有する。このことを「早春雑感」（雄弁一九一九・四）と対照すれば、F・シラーを経由した谷崎の「スタッツ（素材）」の一語が浮上する。同語彙を補助線にすれば、ゲルマニスティックとの接触から、過剰な引用によって編まれたテキストがはらむ媒体上の齟齬への谷崎の処置が確認された。一方でこのことはテキストの整合性を毀損する。作家はテキストの界面の活用とそのジレンマに、「引用」という行為を通じ引き裂かれることになった。

駆け引きとしての読書

——谷崎潤一郎を読む

アンヌ・バヤールⅡ坂井

谷崎潤一郎の作品世界を論じる時、多

くの場合それは作者の観点からなされてきたように思われる。谷崎の文体、繰り返し取り扱われるテーマ、歴史との接点、文化的位置付け等、テキスト論から文明批評的なものでアプローチは様々であるが、その共通点は作者を分析の中心に据えている点にあると言えよう。そこでこの発表では視点を少し変え、「読者」に焦点をあてながら読書のプロセスを顧み、「読者」の位置が如何に作品内に準備され、「読まれること」が如何に文章構築に貢献しているかを、フルフガング・イーザー、ウンベルト・エーコ等の読書論を取り入れつつ、具体的な作品例を取り上げながら考えてみたい。この「読者」とは主に文章に内包された文章機関としての「読者」を指すが、実在の読者はその「読者」を媒介にして、作品に取り込まれ、その機能に加担する。谷崎文学を読む際に我々が覚える独特の快樂は、そこから生じるのではなからうか。

第二会場(三三四教室)

【個人発表】

午前部

芥川龍之介の翻訳作品「クラリモンド」における、ラフカディオ・ハーンの翻訳作品「クラリモンド」の影響

藤原 まみ

ラフカディオ・ハーン(Lafcadio Hearn, 小泉八雲, 1850-1904)と芥川龍之介は、テオフィル・ユージュ(Theophile Gautier, 1811-1872)原作《*La More amoureuse*》(「死霊の恋」)を、それぞれの習作期に翻訳している。ハーンは翻訳作品集『クレオパトラの一夜、その他』(*One of Cleopatra's Nights and Other Fantastic Romances*, 1882)に《*La More amoureuse*》を翻訳した。Charmonde, を収録し、芥川はハーンの『Charmonde』を重訳した「クラリモンド」を久米正雄名義で、一九一四(大正三)年一〇月に発表してい

る。本発表では、言葉の音や色彩まで忠実に再現することを目指したハーンの翻訳作品『Charmonde』の特徴が、それを重訳した芥川の翻訳作品「クラリモンド」に影響を与え、結果として芥川独自の特徴を浮き上がらせていることを確認する。さらに、その特徴が初期作品「天狗」に、どのように表れているかについても考察する。

郡虎彦の海外戦略

——その背景と評価をめぐって

鈴木 暁世

『白樺』の最年少同人菅野二十一として出発した郡虎彦は、英国において五篇の英文戯曲を刊行し、主たる活躍の場を海外に見据えた(日本)と(日本語)の境界をこえた作家と言える。特に、日本の古典に題材を求めた「鉄輪」(*Kanawa : the Incantation*, 1917)や「義朝記」(*The Toils of Yoshitomo*, 1922)は、英国にお

ける婦人参政権運動のバイオニアであるエディス・クレイグが率いるバイオニア・プレイヤーズによるロンドン公演が成功し、他の都市でも上演された。近年はクレイグやジェンダー研究との関わりから、国内よりもむしろ海外の研究者による郡への言及が多く、郡の作品を論じるには海外の研究動向との交通が必要不可欠であろう。本発表では、「義朝記」が評価された要因について、作品に内在する問題を分析するとともに、英文書簡、D・H・ロレンス、詩人W・ビナーらによる同時代評等の新資料を考察することで、西洋における思潮や社会変動と郡虎彦の作品との関わりをクロスカルチャルな視点から再検討したい。

宮沢賢治「風の又三郎」論

——風野又三郎と高田三郎、

二人の三郎の物語

曲 場

宮沢賢治の「風の又三郎」は日本児童文学の代表作の一つとされている。しかしテキストは幾通りも存在し、確定していない。さて従来、高田三郎と風の又三郎が同じ存在であるとされてきたが、私は高田三郎と風野又三郎を分けて、二人の三郎という分身構造があるのではないかと新しい解釈を試みてみたい。

「風の又三郎」の題名の問題や、作中の歌の問題、登場人物の問題、「風野又三郎」から「風の又三郎」までテキストが変遷していくさまを中心に分析すると、視点の移転によって、物語に隠されている主人公風野又三郎を見出すことが可能になる。高田三郎は嘉助などと同じ人間の登場人物の一人であり、ちょうど風野又三郎と同じ二百十日で村にやってきたため、風野又三郎は高田三郎を媒介とし、三郎の姿で子どもたちと遊び、ともに短い時間をすごしたのではあるまいか。これが風野又三郎から宮沢賢治が教えられた物語であり、その子が村に在る間の出来事を記録した形になっている。そこには風野又三郎と高田三郎という、

二人の三郎の分身構造が存在し、さらに子どもたちの見た又三郎と地の文に映った二人の三郎が存在するという、二層構造になっている。こういう分身と二層構造の重なりにより、様々な読解が可能となる余地が生じている。この余地、あるいは隙間こそ、この作品が人々を魅了する不思議な力となっているのではないだろうか。

長島愛生園の女性達

——ジェンダー、ヒロインと一九三〇

年代のハンセン病療養所

田中 キャサリン

本発表では一九三〇年代におけるハンセン病療養所長島愛生園の女性の文学作品について考察する。愛生園の女性入所者の短歌集『萩の島里』と、愛生園の医師であった小川正子の『小島の春』を中心に、ハンセン病の女性歌人やハンセン病にかかわる女性たちがどのようにメデ

イアに描かれていくのかを分析する。

一九三六年、多磨全生園の入所者北条民雄の小説『いのちの初夜』の出版を契機に「癩文学」が一般にも認知されるようになった。各地の療養所では文学サークルが結成され、無名の書き手による作品が多数生まれており、長島愛生園でも同様であった。一方、小川正子は医者として患者に入所を勧める旅の過程を『小島の春』に綴ったが、若くして結核に斃れた。患者と医師という立場の異なる女性の書き手の作品から、病とジェンダーの関係や、メディアによって形成される「悲劇のヒロイン」像について論じる。

一九三〇年代～一九四〇年代の
現地報告からみた日本知識人の
中国認識

——雑誌『中国文学月報』
『中国文学』を中心に

朱 琳

雑誌『中国文学月報』（『中国文学』）は、一九三四年に竹内好らが発刊した中国文学研究会の機関誌である。本誌の内容は学術論文と文芸評論が中心であったが、本発表で注目したのは、本誌に掲載された「現地報告」である。

一九三七年一〇月から、竹内好をはじめ、武田泰淳、飯塚朗、実藤惠秀などの同人は、ある者は留学生として、またある者は軍人として次々と中国に派遣されることとなり、本誌の第三三号（一九三七・一二・一）から、戦争中の中国の現状を報告する文章がしばしば誌上に見られる。

その彼らの「現地報告」からは、中国文化に関心を寄せていた彼らが、戦火に焼かれた中国の現実を直面し、深い葛藤に襲われることになった心情が色濃く浮かび上がっているのである。

本発表では『中国文学月報』（『中国文学』）誌上に掲載された「現地報告」を中心的资料として、彼らの心境を分析する。また、この時期の同人達が創作した小説も取り上げ、彼らの中国認識のあり

方についても検討を試みることにしたい。

午後の部

他者に到達できるか

——留日の中国知識人を描く
作品を中心に

林 麗婷

日清戦争後の明治二十九年、清国が十三名の官費留学生を日本に派遣したのを皮切りに、近代中国人の日本留学が始まった。それから半世紀にわたって、魯迅を始め、周作人、郁達夫、田漢、郭沫若らが後に中国文壇に影響を与えた知識人になった。彼らにとって、日本での留学は様々な意味で重要な経験だと思われる。

また、彼らは何らかの形で日本知識人と交流があった。しかし、両国の知識人が理解し合おうとしたところで、距離感やズレが生じるのも事実であろう。例えば、佐藤春夫が田漢や郁達夫らをモデルとし

て「人間事」「アジアの子」を書いたが、当事者に抗議された。また、太宰治が魯迅の仙台留学を素材に「惜別」を書いたが、竹内好に強く批判された。本発表はこれらの作品をてがかりとして、日本知識人が中国知識人をいかに理解していたか、あるいはいかに理解しようとしていたのかについて考察する。またその過程に生じるギャップについて考えたい。

戦時期の文学賞と「外地」

——芥川賞と朝鮮芸術賞を中心に

郭 炯徳

戦時期における芥川賞受賞作（一九三五～一九四五）の大部分は「外地」（満州・朝鮮・北支・蒙古）における「時局」の推移と密接に関わっている。本発表では次の二つの射程から戦時期の芥川賞を照らし出す。

1) 「文芸統制期」における「文学場」
の変化と文学賞の機能

——『改造』懸賞創作（二～十回）、

朝鮮芸術賞（一～二回）

大東亜文学賞（一～二回）との

比較

2) 企画された「外地ブーム」と「外

地メディア」との連携

——『大陸往来』、『国民文学』、『蒙

疆文学』からの転載

今回の発表は芥川賞を囲んで表れたこのような現象を分析することで、芥川賞における「外地物」がどのように「文学場」と関わっていたかを追求してみた。特に一九四〇年以降の芥川賞受賞作と候補作を分析することで、「外地」に関するまなざしと表象のされかたの変化の過程を分析する。

植民地文人たちの「文化接続」と「発話行為」についての類型化

——朝鮮と台湾における多民族が
参加した言語・文学・出版関
連座談会を中心に

申 知瑛

本研究は植民地末期の朝鮮・台湾で開催された言語・文学・出版に関する多民族座談会を対象とし、植民地文人たちの発話行為の遂行性並びに発話行為の場での「不在」に関して分析する。『改造』『文芸』『文芸首都』（日本）、『新時代』『国民文学』（朝鮮）、『台湾新文学』『文芸台湾』『台湾文芸』（台湾）掲載の座談会テキストを一次資料とする。

研究目的の第一として、日本語化政策が植民地で作動していく時に生じる屈折と変形を政策への（半）強制的動員によって出会った植民地文人たちの関係性において考察することで、政策の渦中にある

って状況を転倒しうる契機を内包した発話行為の汲み上げを試みる。第二に、座談会の場にはおらず、植民地文人の発話にて三人称で語られる者たち(女性・老人・地方民など)の「不在」が持つ意味を探る。本研究ではこれを、植民地文人の一人称が主体の発話と認められなかったことを踏まえ、植民地民において「重層化された不在」と捉えたいうえで、ここから抜け出さんとする情動に他者化された者たち同士の接続の思想を探索する。

「ヨーロッパ」という妄想

——多和田葉子の旅物語をめぐって

エマヌエラ・コスタ

本発表は多和田葉子の作品における「ヨーロッパ」の描写に焦点を当て、越境作家であり、二カ国語で執筆する多和田によってヨーロッパはどのように表象されているのかという点について考察していきたい。多和田文学においては地理

的な空間を辿る旅より、想像の原形とな

る旅のイメージが作品を解釈するうえで重要な鍵となる。それゆえ、ヨーロッパが主に舞台の中心となる作品『容疑者の夜行列車』(青土社、二〇〇二)を分析しながら、旅するという行為を通してヨーロッパとアジアのイメージが多和田の思想においてどのように展開していくかを明らかにしたい。作品における二人称の語り手の使用、主人公のジェンダーや国籍の曖昧さとともに、物語における「空間性のアポリア」(旅物語であるためヨーロッパの様々な町は登場するが、町自体は描写されていない)という点に目を向け、ヨーロッパとアジアとの対立を越えるストラテジーとして読み解くことを目指す。

「越境文学」におけるアイデン

ティティイ形成と革命性

グレゴリー・ワレン・

ケズナジャット

の作品では幾つかの暗示が見えるのではないだろうか。

第三会場(三二〇三教室)

【パネル発表】

午前の部

植民地／帝国の文学の

ネットワーク

——「日本語作家」張赫宙・金史良の再検討を通じて

曹 恩美
高橋 梓
張 ユリ

本パネルでは、植民地朝鮮出身の「日本語作家」として活躍した張赫宙・金史良の文学を再検討しながら、植民地／帝国の文学のネットワークについて考察する。

一九三〇年代から四〇年代前半にかけて、日本語の文芸雑誌・総合雑誌に朝鮮・台湾など植民地出身作家たちの日本語

「越境文学」は近年とみに注目を集めている。この名称はリービ英雄を始めとする日本語を「外国語」として用いる作家や、水村美苗に代表される日本人でありながら多文化的・多言語的な要素を取り入れた独特な作品を創り上げる作家など、多種多様な作家を括っている。彼らの作品には、従来の「日本文学」の概念が当てはまらないこと、またその概念を問い直す機会を与えること、という共通点が認められる。日本語で書かれた「越境文学」をドウルーズによって定義された「マイナー文学」として捉えるならば、これらの作品は日本語や日本文学を播さざる可能性をはらむ存在であるといえよう。しかしこれらの作品には日本文学の中心にあるヒエラルキーを転覆させる要素もあれば、かえってその制度をさらに強化する要素もある。本発表では、「越境文学」の多くの作品において主題として描かれるアイデンティティ形成の過程を検討しながら、この対立を考察したい。

作品が登場し、注目を集めた。そのなかで活躍した張赫宙・金史良の日本文学は、戦後・解放後には、「親日」／「抗日」という二分法の枠組で読まれてきた。近年では、このようなナショナルな枠組をこえて、植民地と帝国が矛盾を抱えながら連関しあう文化構造のなかで、当時の文学を再検討する枠組が現れている。

本パネルでは特に、「帝国」のメディアである日本語雑誌を通じて、植民地／帝国の文学のネットワークが形成されたこと、それは帝国の日本文学への一方的な包摂ではなく、さまざまな相互交流の可能性をはらんでいたことに注目する。そこでは、植民地と帝国、さらに植民地と植民地の間での交流がうまれていた。そのなかで活躍した作家たちは、二言語での創作もおこなっており、植民地帝国が抱えた矛盾をさまざまな形で表現していた。

第一報告である曹恩美「帝国」日本のメディアと張赫宙の日本文学がつながるもの―雑誌『文学案内』『文芸首都』を中心に―では、張赫宙が作品・批評を

小川洋子の日常と身体

——カレンダー、日記、食べ物の真実

グレイス・ティン

多くの作品の中で、小川洋子はカレンダーや日記を通じて日常の真相を問い、そして繰り返し不気味な描写で体の異常を示す。同時に、食べ物も日常のかけがえのない一部として、時間性・空間性が複雑に重なり合っていることを具体化している。本論文は、一九九一年の『妊娠カレンダー』と『シュガータイム』を中心に、日常の時間・空間が身体にどのように関わっているのかという問題について論じる。この作品のなかで、カレンダーや日記という日常的な記録が女性の体を整理している過程、さらに食事という日々の儀式が作っていく時間性・空間性について検討する。日常の些細なことには何が隠されているか、或いは日常からどのような真実が現れてくるか、小川

発表した雑誌メディアに注目し、植民地と帝国の文学のネットワークのあり方を解明する。「餓鬼道」(『改造』一九三二年四月)で懸賞作家として日本文壇にデビューした張赫宙の初期作品は、帝国日本による植民地統治下の朝鮮農村の苦難を描きだすものであり、当時のプロレタリア文学系の雑誌メディアとの関係も持つようになる。一九三三年一月には『文芸首都』の同人になり、朝鮮や台湾の新人作家の推薦・紹介をする一方、一九三六年一〇月にはプロレタリア文学系の雑誌『文学案内』の編輯顧問となつて、朝鮮文学の紹介・翻訳に取り組んでいく。

これらの活動は、村山知義らとの協同作業による「春香伝」上演(一九三八年)や、『朝鮮文学選集』全三巻(赤塚書房、一九四〇年)の編集にもつながっていく。このような雑誌メディアとの関わり、植民地と帝国の文学のネットワーク形成のなかで、張赫宙の日本語文学を読み直すことを試みる。

第二報告である高橋梓「金史良の日本語作品を読み直す―雑誌『文芸首都』

主体のありようを、当時の帝国日本の地政学的枠組みである「内地」と「外地」との振幅の中で捉え、その主体の構築の過程で生起する揺らぎや矛盾を明らかにすることを目指す。発表を行うのは、日本近代文学専攻の中国出身、韓国出身の研究者と、朝鮮近代文学専攻の日本出身の研究者という、三名の若手研究者である。

最初の提題者である金ヨシロンの「幽閉」された個の眼差し―井伏鱒二「幽閉」から「山椒魚」への(改稿)問題―では、井伏鱒二の「幽閉」(一九三三年)から「山椒魚」(一九二九年)への(改稿)問題を扱い、二つのテキストが書かれる最中に起こった、一九二五年の男子普通選挙Ⅱ治安維持法体制の確立(および、それと関連した内地における「他者」の抑圧と「帝国臣民」の統合)との関連を考察する。ここでは、「幽閉」から「山椒魚」への改稿過程に作家井伏の(成長)や「井伏文学」の成立を見出すアプローチとは異なり、同時代の政治・社会状況と確かに関わりあうものとして両テクス

における植民地出身作家の交流と金史良の二言語作品」では、雑誌メディアを通じた植民地出身作家同士の交流を明らかにするとともに、金史良の二言語作品の新たな読解を試みる。植民地出身作家の作品を多く掲載したことで知られる文芸同人誌『文芸首都』には、張赫宙、金史良、金達寿、台湾人作家・龍瑛宗らが同人として参加していた。毎号の巻末に掲載された同人たちの読書会の記録などを手がかりに、日本の雑誌メディアに同人として参加したことによって、植民地出身の作家たちが互いの作品を批評しあう場が形成されていたことを明らかにする。そして、日本文壇で多くの作品を発表した金史良の日本語作品「蟲」(『新潮』一九四一年七月)と、同じテーマの朝鮮語作品「지그미(チギミ)」(『三千里』一九四一年四月)の比較分析を通じて、発表されるメディアや言語によって、作品の問題関心や表現に差異が現れることを提示する。

以上の発表にたいして、当時の日本語トを捉えなおすことを目指す。続いて、相川拓也「植民地での中学時代―中島敦「プールの傍で」論」では、中島敦の遺作「プールの傍で」(一九三二年頃)を取り上げる。日本人男性のコミュニティとしての京城中学や家父長的空間としての家庭、そしてその外に広がる「外地」的・植民地的世界での中学時代を回想する三造の男性性に着目するとともに、テクストによってたえず喚起される朝鮮における帝国日本の支配の影をたどることで、帝国日本における覇権的男性性と向き合う主人公・三造の主体の揺らぎを浮かび上がらせる。力の論理への疑いを観念として持ちながらも、植民者という地位を脅かされることのない三造の人物像を通じて、帝国日本におけるドメスティックな暴力と植民地主義との関連を明らかにする。

最後に、黄瑗亮「武田泰淳『上海の蜚』における「無国籍者」の生と死」では、一九四四年六月から翌年の敗戦までの上海を舞台とした武田泰淳の『上海の蜚』の読み直しを試みる。敗戦直前における

学・モダニズムや雑誌メディア(馬海松が編集長を務め、朝鮮版で注目された『モダン日本』など)を研究する張ユリがコメントをおこない、フロアの参加者とともに議論を深めていく。

午後の部

帝国日本の男性臣民

―抑圧と暴力の諸相

金 ヨシロン
相川 拓也
黄 瑗亮
米谷 匡史

本パネルは、一九二〇～四〇年代の帝国日本、およびその植民地や占領地を背景とした文学テクストの読解を通じて、帝国日本の男性臣民という主体が構築される際に起こる抑圧の転移・連鎖を問いなおし、その乗り越えの可能性を議論の射程とするものである。各テクストに描かれた、それぞれ異なる位相にある男性国共両党の対立やヨーロッパ列強の撤退と、敗戦直後のアメリカ軍の介入という騒乱の中にある上海という都市における「無国籍者」(主として白系ロシア人とユダヤ人の難民)の姿を読み解きながら、彼らの運命に微妙に共感した、上海の地で日本の敗戦を目撃する日本人男性の複雑な難民意識と「無国籍状態」(statelessness)をテクストにおいて捉える。そのうえで、旧植民地の秩序の崩壊が誘発した国民国家への反省、およびその境界線を越えた人類の「種族」としての生と死への反省が持ちうる可能性を考察する。

第四会場（三三〇三教室）

【パネル発表】

午前部

境界の危機

— 読者・表象・敵対性

五味淵 典嗣

エドワード・マック

千 政煥

境界は、さまざまな力がせめぎ合う緊張の現場である。内と外、自己と他者、「われわれ」と「彼女ら・彼ら」を分かち線は、排除や包摂、差異化や階層化、抑圧や結合といった力の作用にさらされるが、不断に上書きされている。だが、それは同時に、こうした境界がつねに監視され、管理されねばならない危うさははらんでいること、ゆえに批判的な介入の契機となりうることを物語りてもいるはずだ。以上のような問題意識から、このパネルでは、必ずしも職業的な文学者とは言えない書き手たちのテクストが、

人種、ネーション、制度化された文学といったカテゴリーの境界に関わる混乱を引き起こしていく様相に注目する。報告を行う三名は、年代・場所・言語を異にする対象について言及するが、それぞれの対象の個別性に留意しながら、テクストや表象を議論する方法に関する対話へと接続していきたい。なお、議論の際には、韓国語の通訳者を依頼する予定である。

五味淵典嗣は、日中戦争期に発表された戦場体験者による戦記テクストを取り上げる。この時期の戦記テクストには、戦場で身体の本質的な脆弱さと直面してしまった書き手たちの経験が、「銃後」と共有可能な物語に接続されていくという構造を指摘できる。だが、中国の「膺懲」という奇妙なスローガンを掲げた「支那事变」の語りの中では、敵の表象はしばしば揺れ動き、その結果、書き手が自己自身の体験を翻訳する過程で、興味深い亀裂と混乱とが刻まれてしまうのである。五味淵の報告では、日本語の戦記テクストをこうした表象の抗争の現場と捉

え、ときに戦争の継続自体を危うくさせる可能性さえ潜在させている戦場の表象がどのように語られ、どのようなには語られなかったのか、検討を加える。

エドワード・マックは、一九三〇年代のブラジルで書かれ、ブラジル日系文学の代表作として複製されているいくつかの小説を対象とする。人種的な多様性で知られるブラジルで、自然主義的リアリズムの手法によって書かれた日本語の小説は、当時の人種差別的なイデオロギーや、人種的な他者の表象を主要なテーマとしていると思われるかも知れない。だが、それらのテクストで問題となるのは、むしろ他者ではないはずの「同胞」であり、その「内なる他者性」なのだ。しかも、この場合の他者性は、少なくとも二つに種別化できると考えられる。一つは、後天的に獲得された他者性でも言い表すべきもの。もう一つは、何らかの理由で同一性からの逸脱と見なされた瞬間に析出される他者性の表象である。マックの報告では、複数の小説に指摘できるこうした他者性の問題について、テクスト

の分析を踏まえた考察を展開する。

千政煥は、一九八〇年代の韓国における労働者文学会の活動について議論する。全斗煥政権下の新軍部による規制と暴圧の中で、既存の「文壇文学」外で編み出された「下からの文学」「民衆の文学」は、無視できない重要な役割を果たしていた。しかし、現在、こうした文学に関わる資料や記憶は、激しい忘却にさらされている。そこで、千の報告では、労働者文学会を媒介に労働者文学と労働者の読書のあり方を概括することで、一九七〇—八〇年代の韓国労働者が「非識字から文芸へ」急激に飛躍していった過程を捉え直すことをめざす。具体的には、特に一九八〇年代後半の事例に注目し、

(1) 地域や労働組合、夜学などの活動と結びついてきた労働者文学会の活動を整理し、(2) 労働者文学会の読書活動と、既存の文壇や文学的カノンの影響について検討する。加えて、(3) 文学会活動のメカニズムをめぐって、労働運動や労働者文学運動との相互性に着目しつつ、エスノグラフィックな分析を行う。

午後部

文を学ぶ

— 近代東アジアの教育と

エクリチュール

(発表者) 宮田 沙織

(発表者) 柳 忠熙

(発表者) 王 煜丹

(コメンテーター) 北川扶生子

一九世紀末から二〇世紀初頭にかけての東アジアには、西洋思想の翻訳・輸入を通して新たな学知が導入された。教育やメディアの変容は、従来の漢字・漢文に基づいた読み書き空間とは異なる言語空間を出現させた。この新たな言語空間、すなわち近代的な学校や新聞・雑誌、作文書や文範書の間でのエクリチュールにおける学知もまた変容していった。

当時の人々が取り入れた「近代的」思想だけでなく、それによって制度化され

た「文学」もまた、このようなサイクルの中でその輪郭を形成した。それゆえ、それらについて語る際、教育やメディアの変容によって生じた新たな読み書きの圏域がどのようなものであったかは不可欠の視点となる。

本パネルでは、東アジアにおける学知と教育の変容という問題意識を共有し、日本・韓国・中国における教育とエクリチュールの相互的な変容について各国の事例を報告する。新たな思想やエクリチュールが往還する一つの緩やかな圏域である近代東アジアにおいて、具体的な読み書きの場では何が生じていたのか。その一端を明らかにすることで、東アジアにおける「近代文学」の形成をめぐる場について考察する視点を提供する。

宮田沙織は「造化の言葉としての理科」と題し、山県悌三郎訳補『理科仙郷』（一八八六—八八）を中心に理科の言葉が近代日本の詩的言語の形成において果たした役割について検討する。『理科仙郷』は

雑誌『少年園』の主幹として知られる山県が、Alabella B. Buckley *The Fairyland of Science* に基づいて執筆した理科読み物で、当時二万部をこすベストセラーになった。「理科」という新たな学知によって世界を解釈する方法を説く本書が、当時の人々に科学啓蒙書としてだけでなく、自然を描写する「妙文」としても受容され、一種の作文範として機能したこととは見過ごせない。本発表では『理科仙郷』における「目に見えざる諸力」すなわち「造化の力」を可視化する言葉としての「理科」という位置づけに特に着目しつつ、理科の言葉がいかに読み書きされたのか、作文作詩における理科系語彙の用例を追う。

柳忠熙は「二〇世紀初頭の朝鮮における漢字・漢文教育と尹致昊(ユン・チホ)の『幼学字聚』(一九〇九)」について報告する。甲午改革(一八九四—一八九五)に出された科挙廃止令と小学令によって、朝鮮王朝の政治・学問の根幹をなしてきた漢字・漢文教育の位相の変動が起る。こうした漢字・漢文教育の政策的な

再編成は、20世紀初頭における多様な漢字・漢文教科書を生み出す要因となる。本発表では、この時期の漢字・漢文教科書のなかで、児童向けの漢字学習書に焦点を当てる。特に、儒学に批判的な立場を持っていた尹致昊(ユン・チホ)と、彼が著した『幼学字聚』(一九〇九)に注目する。当時の漢字・漢文廃止制限をめぐる議論を視野に入れ、儒学者の観点とは異なる漢字教育の模索の意味を探る。

王煜丹は「梁啓超の『中学以上作文教学法』(一九二二)から見る新しい作文観」について報告する。一九世紀末から二〇世紀初頭にかけて、中国では難解な文語文を廃して口語文を使用することを提唱する文学改革運動が行われた。その成功によって、白話と呼ばれる口語文体が文学の正統となり、書記体系の様相も大きく変容したのである。その中で、初中等教育段階における少年層向けの作文指導の変化は典型的な一例とも言える。本発表では、近代中国における文学改革運動の中で大いに活躍していた人物であ

る梁啓超の作文教育指導書にあたる『中学以上作文教学法』に注目し、同時期のほかの作文指導書と見比べながら、当時の新たな作文観のありかたについて検討する。

第五会場(三四〇三教室)

【パネル発表】

午前の部

東アジア探偵小説史の

展望と可能性

(司会) 吉田 司雄

(発表者) 兪 在眞

陳 國偉

(ディスカッサント) 藤井 得弘

一九世紀に西洋で生まれ発展した探偵小説(Detective Story)は、その世紀のうちに東アジアにも到来し、翻案・翻訳さらには創作と批評とが試みられ、やがて多くの読者を獲得するに至った。探偵小説は近代的な法制度の整備された民主

主義国家でしか発達しえない、とアメリカの探偵小説研究家ワード・ヘイクラフトはかつて述べたが、『娯楽としての殺人』(一九四一年)、西洋的なカノンに囚われることで見えなくなっていたものも、あるいは大きな歪みを伴ってしか可視化されてこなかったものもあるはずである。

日本の探偵小説についてはすでに多くの研究が蓄積され、包括的な通史の試みもなされてはいるが、本パネルではその通史の範囲を仮説的に東アジア全体に広げ、とりわけ帝国日本の植民地となった過去を持つ朝鮮半島と台湾での事例に目を向けながら、これまでの日本探偵小説史を相対化しつつ、東アジア探偵小説史の可能性を模索してみたい

韓国については、兪在眞(高麗大学校)が報告する。高麗大学校の研究チームは日本語探偵小説の韓国語への翻訳状況を精査(高麗大学校日本研究センター『日本研究』第一七号、二〇一二年)、黒岩涙香「無惨」から坂口安吾「不連続殺人事件」に及ぶ全一三巻の近代日本探偵小

説全集の翻訳作業が続いている。今回は、植民地朝鮮での日本語探偵小説の流通と韓国語探偵小説への影響、韓国人や在朝日本人による日本語探偵小説やスパイ小説の創作などを概観したうえで、植民地支配者として植民地を背景に書かれた在朝日本人の探偵小説が西洋の探偵小説や〈内地〉日本の探偵小説と如何なる違いを見せているのかを検討する。植民地に向けられた幻想と植民地での幻滅の錯綜する視線を在朝日本人の探偵小説を通して考察する。

台湾については、陳國偉(国立中興大学)が報告する。科学・理性・秩序など近代性をめぐる諸概念がいかにトランスナショナルな移動を経て台湾の推理小説における探偵の「身体」を作り上げたのかを系譜的に辿るなど、これまでも台湾ミステリ史の構築に取り組んできたが、今回は、台湾ミステリ小説に影響を与えた日本の科学に対する認識とその翻訳について検討する。台湾ミステリにおいて、日本犯罪科学についての吸収と運用は日本統治期からすでにみられるが、現代台

湾ミステリ小説の「科学回帰」に莫大な影響を与えたのが、島田荘司である。台湾の作家は島田荘司が一九八〇年代から始めた幻想性本格ミステリと二〇〇〇年以後提唱した「最新科学」を融合し、怪物化した身体を台湾ミステリ小説の中で次々と作り出し、多様かつ「不思議」な謎と犯罪トリックを生み出しているが、ミステリとSFとのジャンル侵犯の問題として考察する。

全体の進行は吉田司雄(工学院大学)が担当する。また、中国文学研究の藤井得弘(北海道大学大学院文学研究科博士後期課)がデイスカッサントとして参加する。東アジアという視座で探偵小説史を検討するとき、見逃せないトピックの一つは中国の公案小説の影響である。日本でも江戸時代の慶安年間に『棠陰比事』の日本語訳『棠陰比事物語』が人気を得て以降類似した裁判物が続々刊行され、大岡政談などの実録にも公案小説から素材をとったものがあるというが、西洋起源の探偵小説とはまた異なる犯罪物語群が近代化の流れの中でどのように受容さ

れていったかを考えてみるだけでも、いわゆる漢文化圏としての東アジアという視座のもとで議論する意味が見いだせるのではないだろうか。

本パネルでは何か結論を出すということよりも、今後考えるべき課題をできるだけ浮上させる形で議論をすすめたい。それゆえフロアの方からの積極的な関与を強くお願いしたい。

午後の部

〈当事者／非当事者〉を

めぐるポリティクス

中谷 いずみ

岡村 幸宣

川口 隆行

松永 京子

本パネルのねらいは、ある出来事や事態において見出される〈当事者〉〈当事者性〉に着目し、それに関わる言説や表象、欲望の対象としてのありようなどを

検討することで、〈当事者／非当事者〉をめぐるポリティクスを問い直すことにある。

出来事や事態が生じた時、それに直接関わる者を〈当事者〉と呼ぶ。法的概念でもあるこの定義は〈当事者／非当事者〉〈当事者／第三者〉という区分を生むが、その際〈当事者〉を前景化する遠近法が立ちあがる。もちろん、誰かが被る不利益や傷が問題化される際に、その損や傷を受ける立場の人びとが注目されるのは当然なのだが、しかしこの区分は時として、事態と切り離し得ない立場にある者と、事態に向き合うことなく過ごしていきける者という意味を帯びることで、その事態を保持し、あるいは利用し続ける場の力学を不可視化する。それによって、問題を〈当事者〉の領域に押しこめ、他者化するような事態をも招いてしまうのである。

本パネルでは、こうした問題を踏まえつつ、冷戦とそれ以後の国際情勢の変動、そして政治的社会的状況の変化の中で、文学や映画、美術など表象に関わる分野

めぐる物語の所有／非所有と表象の作用について考える。

なお、対象とする時代も題材も多岐にわたる三人の報告を受けて、北米先住民文学や環境文学、原爆・核文学を専門とする松永京子がデイスカッサントとして問題を提起し、会場へと議論を開く役割を担う。

〈当事者〉という名において、ある人びとが呼びかけられる時、あるいはその名を引き受けて人びとが語り始める時、そしてその名を引き受けた人びとを囲い込むように〈非当事者〉のまなざしが向けられる時、そこでは何が起きているのか。異なる関心領域からの報告が交差する地点で考えてみたい。

が〈当事者／非当事者〉のポリティクスにどのように関与してきたのかを捉え直すこととする。以下、それぞれの報告概要を記す。

日本近代文学を専門とする中谷いずみは、本パネルの趣旨説明を含めるかたちで「〈当事者／非当事者〉表象とナショナルリズム」と題した報告を行う。ここでは、経済格差や逆コース、冷戦体制強化という流れの中で、権力への対抗軸として政治のひずみを背負わされた社会的弱者が歴史的存在として見出された一九五〇年代前半を取り上げる。特に、国民文学論や国民的歴史学運動をめぐる言説に着目し〈当事者／非当事者〉の区分が呼び込む権力構造や当事者性をめぐる枠組みについて、またそれらがナショナルリズムの言説と結びつく地点について、今の問題を見すえつつ報告する。

美術を専門とし、原爆の図丸木美術館学芸員である岡村幸宣は、「Chim → Pom」における当事者性」と題した報告を行う。被爆者の証言を聞きながら共同制作《原爆の図》を描き、〈当事者〉の記憶を〈非

当事者〉と共有する試みを続けた丸木位里・俊夫妻。半世紀以上の時間の隔たりの後に登場した Chim → Pom は、そうした〈当事者〉と〈非当事者〉の境界を根底から揺るがす作品群を発表して社会を攪乱し続ける。両者の作品を対比しながら、〈非当事者〉が〈当事者〉の記憶に迫ることは果たして可能か、そもそも〈当事者〉という枠組みは成立するのかという問題について考える。

日本近代文学を専門とする川口隆行は、「霧社事件」は誰の歴史物語か」と題した報告を行う。今春日本で劇場公開された台湾映画「セデック・バレ」（ウェイ・ダーション脚本・監督）を取り上げ、「霧社事件」をめぐる語りとその所有について、歴史的側面を踏まえつつ考察を試みる。この映画の題材となった「霧社事件」は日本語、中国語、原住民語などを介して繰り返し語られてきた。だが、その語りは誰によってどのように行われてきたのか。「霧社事件」をめぐる語りと国家や地域社会の政治的社会的文脈とあわせて考察することで、〈当事者〉を

第六会場（三〇四教室）

【パネル発表】

午前の部

〈韓流〉と〈日流〉の

先にあるモノ

——創造と変容をめぐる

いくつかの事例

光石 亜由美

孫 知延

古川 裕佳

趙 柱喜

「冬のソナタ」のヒットに始まる日本の〈韓流〉ブームは、その熱気はおさまったといえ、現在も続いている。しかし、韓国文化への注目とは「冬のソナタ」に始まるわけではなく、二〇〇二年の日韓共催ワールドカップ開催を契機とした日韓共同ドラマの制作や、韓国映画の日本でのヒットに見られるように、二〇〇〇年前後から徐々に高まっていた。一方、韓国では、〈日流〉という言葉があるよう

に、以前から、日本文化への興味は高く、一九九八年の日韓共同宣言による段階的な日本文化の解放措置を契機に日本文化を楽しめる環境が拡大してきた。日本の小説への関心も高く、二〇〇六年には、韓国の書店で日本の小説の売上が、韓国小説のそれを初めて上回ったことがニュースになった（韓国・教保文庫調べ）。現在、韓国の大型書店にゆけば、日本の小説、マンガ、ライトノベルのコーナーがあり、書店の一角を占めている。

日本は韓国の、韓国は日本の文化を、ほぼリアルタイムに享受できる環境にある。もちろん、それはすべてのものが同一に楽しめるというわけではなく、そこには取捨選択が働き、何を移入するか、という選択には、それぞれの国や文化の思惑が働く。また、翻訳という行為を通じてであるが、他国の文化を、自国の文化のように享受できる環境は、これからの文化創造の形態を大きく変えてゆく可能性がある。

今回のパネルでは、日韓の現代文学、現代文化のインターフェイスとして、共

同制作という行為のもつ意味と、他文化受容とその変容について考えてみたい。

まず、総論として日韓の文化交流史、そこに見られる評価点と問題点を指摘したのち、辻仁成と孔枝泳が、韓国ハンギョレ新聞に共同連載した「사랑은 예외일 수 있다」(邦題『愛のあとにくるもの』)の戦略の検証から、「共同制作」という行為のもつ可能性と限界を検討し、そして〈韓流〉に顕著な〈恋愛物語〉という文化戦略を見てゆく(光石亜由美)。

また、日韓国交樹立四〇周年を記念し、日韓友好という目的から執筆されたこの小説が、実際に韓国と日本の読者たちにとってどのように読まれ、受け止められたかを、読者レビューを通して分析する。また、辻仁成と孔枝泳、二人の作家の歴史認識がテクストのなかの男女主人公のラブストーリーにどのように溶け込んでいるかを考察し、〈韓流〉(日流)ブームに頼って、複雑に絡んだ日韓関係を、あまりにも簡単に乗り越えようとした作家および出版社側の戦略不在を批判的に考察する(孫知延)。

次に、文化受容とその変容のモデルケースとして、日本と韓国における小説やライトノベル、サブカルチャーなどにあ

らわれる恋愛物語の主題について具体的事例を検討する。まず、日本における女中や看護士を主人公とした物語の展開について、その主題を近代日本が西洋文化から取り入れ、日本近代文学の中で醜態させ、そして現代の「萌え」文化にまで変質させていった様相について考察する(古川裕佳)。さらに、韓国における日本のサブカルチャーの受容を、ライトノベルを中心として考察する。日本のライトノベルの輸入から、韓国人ライトノベル作家の登場に至るまでの歴史を探り、作品の構成と主題を日本のそれと比較し、その特徴を調べ、現在の市場規模と今後の展望に関して分析することによって、韓国における日本文化の位置づけを検討してみる(趙柱喜)。

は検証してみたい。さらに、日韓という近接する文化領域において生み出される、新しい文化発信、文化受容の形態はいかなるものか、そこに日本文学研究はいかにコミットできるのか、ということも視野に入れてみたい。

午後の部

BLの中の世界／

世界の中のBL

——「わたしたち」は何に萌えているのか？

岩川 ありさ

秦 美香子

守 如子

杉本 ジェシカ

(コメンテーター) 藤本 由香里

本パネルでは、世界規模で受容されるようになって久しい、「BL」(ボーイズラブ)という表現形態について、国際的な視点からとらえ、日本文学、社会学、

マンガ研究など、学問領域を横断する形で、ジェンダー規範やヘテロセクシズムとの相互関係について議論する。その際、BLマンガ、BL短歌、スラッシュなどを対象とし、広く、現在の文化的な配置の中で、何故、BLという表現が受容されるか、歴史的な経緯について整理する。その上で、女性たちの欲望の表出の困難さをめぐって明らかになるジェンダー不均衡の問題や同性愛表象をめぐる政治性との関連について触れたい。

岩川ありさは、「BL短歌」という新しいジャンルについて、文学研究の側面から報告する。「BL短歌」には、男性同士の親密な関係が直接的に描かれたものと、「そのように読めるもの」とに大別できる。「BL読み」できる短歌とは、いわば、規範的な性的枠組みが働いているところに斜線を入れる批評行為によって見出され、国家や社会の中で固定化された、ヘテロセクシズムを問い直し、規範的なジェンダー／セクシュアリティを維持しようとする力学へと介入してゆく

クイア・リーディングの一種と定義できるかもしれない。本発表では、「BL短歌」というジャンルにおけるクイア・リーディングの可能性について考察する。

秦美香子は、女性の欲望をめぐるマスメディアのナラティブイティについて考察する。BL表現は、男性登場人物の親密な関係を描くことを通じて想定読者である女性の性的欲望を描写する表現様式であると考えられることがある。そうした複雑な語りの方法が展開されていることを、女性の官能を扱うマスメディアのナラティブイティについて論じた国内外の研究を参照しながら確認したうえで、現在のジェンダー秩序のもとで女性の欲望を語ることは困難なのかという問題について議論する。

守如子は、マンガ表現の歴史をふまえて、最新のマンガ表現論を通して、BLについて議論を行う。マンガ研究において、「マンガはどのように表現しているのか」に着目するマンガ表現論に注目があつまっている。マンガ表現論は、表現技法の創造が「マンガが何を表現するか」

を支えてきたことを明らかにしてきた。本報告では、少女マンガと少年マンガの表現技法の違いをマンガ表現論から明らかにすることで、日本のマンガ・アニメの国際的流通と、マンガ・アニメファン文化の発展（BLの享受まで）の関係、特に中国の状況をベースに論じる。

杉本ジェシカは、グローバル時代のBLについて報告する。海外での日本マンガブームが始まって、はや一八年が経つ。フランスやアメリカ合衆国に限らず、アジアや南米を含む諸外国でも、現地のマンガ業界に読者としては無視されてきた「女子」は、日本の少女マンガにはまり、そしてBLを発見することとなった。それぞれ文化背景も異なり、同性愛に対する認識や態度、それぞれが生きる社会の「一般常識」とされることも異なっている。にも関わらず、BLには「普遍的」といえるアピールがあり、たとえ法律上で同性愛の描写が禁じられていても、腐女子たちは頑張って工夫をし、社会秩序に逆らうまでその嗜好を追求してきた。本発表では、こうした様々な状況に置か

れた「グローバル腐女子」の生き方について議論したい。

以上のように、本パネルによって、幅広い学問領域において、多言語でなされているBL研究の「現在」を明らかにするとともに、「近代」におけるジェンダー／セクシュアリティそのものの間いなおしを行おうとする研究者たちの間に、新たなインターフェイスを構築したい。

第七会場（三〇三教室）

【パネル発表】

午前の部

「上海遊記」

——一九二〇年代上海をめぐる
欲望とメディア

（司会・発表者）篠崎 美生子

（発表者）王 書璋

林 颯君

秦 剛

近代日本の文学者、美術家、ジャーナ

動（一九一九）から中国共産党建党、ワシントン会議（一九二一）へと到る時代、国家の危機を回避しようとする立場の中国紙『申報』と、山東省の領有権を保持したいという日本政府の立場を代弁する『大阪毎日新聞』が、互いに記事を引用しつつ批判しあうという紙上の様子も、今日、確認することができる。そのような緊張感の中に置き直してこそ見えてくる「上海遊記」の特質をも、発表では明らかにしたいと思う。

発表内容は、それぞれ以下のように分担したいと考えている。まず、篠崎が司会を兼ねて本発表の意図を述べたのち、「上海遊記」と連載紙との関連について概括する。王は、「上海遊記」の「南国の美人」章の検証を通じて上海の「娼婦」像を洗い出し、読者の欲望とその再生産について述べる。林は、同じく『大阪毎日新聞』に連載された「江南遊記」との比較を通じて、「上海遊記」の「創作」性を明らかにする。秦は、「日本人」の「上海」への欲望が後年幸運な形で実を結んだ例として、内山書店を中心とする

だ謎に満ち、断片的なイメージに取り巻かれていた当時の「上海」像を、整理して新聞読者に提供したという「上海遊記」の一面が見えてくるのだ。

すでに発表メンバーによる一部の指摘があるように、「上海遊記」には必ずしも芥川の実体験とはいえない「小説」的な記述もある。また、滞在時ではなく連載時の時事記事と関連のある記述も見いだせる。さらに、このテキストは編年体の記述を装いながら、「魔都」「革命」「西洋」から「演劇」「宗教」「日本人会」にいたるまで、近代日本でそれまでに「上海」について語られた言説を集大成し、キー概念を網羅する形で組み立てられている。その一方で、「上海遊記」発表後の他者による「上海」記には、何らかの形で「上海遊記」の言説をなぞる傾向がみられるようだ。とすれば、「上海遊記」は、単に芥川個人の問題を超えて、近代「日本人」の「上海」に対する欲望を列挙するとともに、それを再生産する役割を果たしたことになるだろう。

折しも当時は、パリ講和会議、五四運

リストなどのうち、一九二〇年代初頭までに上海を旅した者は少なくない。しかも、その体験がその後の彼らの創作に大きな影響や転機を及ぼしたケースが多いにも関わらず、その上海体験が詳細に語られることは少なかった。当時の国際的な権力関係を背景に、公にはしにくい体験でも経たのかといふかられるほどに、彼らの回想は表面的、断片的なのである。

その中で異彩を放っているのが、芥川龍之介の「上海遊記」である。一九二一年八月〜九月に『大阪毎日新聞』『東京日日新聞』に連載されたこのテキストは、これまで、特派員として中国に派遣された芥川の上海体験を如実に語った紀行文として扱われてきた。そしてその上で、芥川にとつて上海体験がどのような意味を持ったのか、芥川の中国理解にどの程度の正当性があつたのかについて、多くの研究がなされてきた。

しかし、書き手の側からではなく、新聞読者の側からとらえ直した時、このテキストの様相は一転する。多くの日本人があこがれを抱いてわたりながらも、未文化交流にまで話題を広げる予定である。

午後の部

越境するメディア

——東アジアへのまなざし

（発表者・通訳）金 閻愛

（司会・発表者）村上 陽子

（発表者）山崎 信子

林 泰勳

かつて帝国日本の侵略により、その支配下に置かれた東アジア諸地域は、言語の収奪、既存の社会関係や生活基盤の破壊、凄惨な戦争を体験することとなった。帝国日本が敗戦によってアメリカの占領下に置かれた後は、アメリカの政治的・軍事的覇権と冷戦戦略がこれらの地域を席卷し、新たな植民地支配の構図を生み出した。このような歴史体験の中で紡がれてきた文字には、さまざまな抵抗や、幾重にも抑圧された人々の声が織り込ま

れている。

本パネルでは、戦争／占領／植民地支配を生きた体験を踏まえて一九五〇年代から一九七〇年代にかけて発表された文学作品を、社会運動、記憶、人種、民族、階級、ジェンダーなどの視座から照射し、戦争／占領／植民地支配に抗する思考が文学においてどのようなかたちであらわれているかを明らかにしていく。それは、日本とアメリカという二つの「帝国」の暴力を浮き彫りにする試みでもある。

日本、韓国、アメリカという多様な場所の研究を続ける本パネルの報告者がそれぞれ抱えている問題意識をあえて統一しないままに拡散させていくことにより、文学や歴史体験を含む「東アジア」の時空間がはらんでいる亀裂と矛盾を露わにし、一様ではない体験を経て生み出された言葉や思考が結び合う可能性を模索していきたい。

金閨愛は、戯曲「人類館」(一九七六)の主な上演主体である演劇集団「創造」の上演活動について分析する。一九〇三年に大阪で起きた「学術人類館」事件を基本的

なモチーフとして沖繩の近現代史を描いた「人類館」の上演活動から見出せる植民地支配と占領の経験に着目し、分析する。また沖繩本島と離島との関係、日本本土と沖繩との関係に打ち込まれている「帝国」について考える。

村上陽子は、大田洋子「半人間」(一九五四)を取り上げる。「半人間」の主人公は原爆体験を小説に書くことの辛さをまぎらわすために薬物中毒となり、睡眠療法で治療を受ける女性作家である。彼女の病室には戦争や占領に起因する不幸によって精神的な病を発症した女性たちが集まる。原爆や引き揚げ、朝鮮戦争や占領が女性たちにどのような体験を強いてきたかをたどり直し、ジェンダー、狂気、階層などによって発話の機会を奪われ続ける女性たちの位相を分析していく。

山崎信子は上海日本人社会の母親たちと日本人売春婦とのあいだの緊張した力関係を分析しつつ、林京子「黄砂」(一九七七)に描かれた「ネーション」の概念を理論化する。分析の枠組みとしては、

第八会場(三五〇四教室)

【パネル発表】

午前の部

日韓文学の関連様相

——近現代の文学史・比較研究を

中心に語る

(ラウンドテーブル)

(司会) 渡辺 直紀
(発表者) 波田野 節子
沈 元燮
金 在湧
ナヨン・エイミー・クオン
(討論者) ジョン・トリート
崔 泰源

近現代文学研究における日本と韓国の関連様相について、日本、韓国、アメリカで研究の一線に立ってきた研究者らがそれぞれの意見を述べるラウンドテーブルセッション。主として韓国・朝鮮の近現代文学の研究者がこれまで重ねてきた研究のなかで、日本文学や日本語の問題が深く関与

するいくつかの主題について、それらがこれまでどのように扱われてきたか、また今後それらをいかに考えるべきかを提示し、韓日文学の比較研究およびその理論化のあるべき方向性をさぐる。

朝鮮では開国の過程の甲午改革(一八九四―一九五)で政府公用文にハングル文体(この場合、漢字・ハングルまじりの文体、いわゆる「国漢文」)が採用され、その論説文体による新聞なども創刊され、それら新聞に連載される小説でも総ハングル文体の創造が試みられた。このようななかで書かれた翻案小説や政治小説の内容および文体は、日本のそれとの比較・対照の対象となる。

また一九一〇年の日韓併合前後から日本に留学した朝鮮半島の青年たちのなかから、当時の日本の文学思潮の環境に接するなかで朝鮮新文学の土台を作り上げる李光洙(イ・グァンス)のような作家があらわれる。その後の民族運動の過程で彼は対日協力の道に進むが、その際にも動員されたのが彼のエクリチュールにおける啓蒙の文体であった。一方、一九二〇年代の朝鮮におけるいわゆる「文化政策」によって民間新聞を

ジェンダー、セクシュアリティ、人種、階級をもちいる。林京子の「国家」や「ネーション」にたいする批判的なまなざしについても考察する。

林泰勳は、ある詩人が朝鮮総督府の残党によって発信される海賊放送を聞いているという物語である崔仁勳の「総督の声」(一九六八)を扱う。脱植民地の失敗と新植民地状況、挫折させられた民主主義、レッドコンプレックスの国民化過程などを批判するために、越境する電波という想像力が小説化されたことは一九六〇年代の韓国社会のリアルな反映でもある。禁止された音に対する聴取欲望を素材として用いた崔仁勳の文学作品を通じて、国民化の抑圧的な装置に抵抗するメディア実践について論じる。

なお、本パネルの司会は村上陽子が担当する。発表言語は日本語と英語、質疑応答は日本語と韓国語を使用する。通訳は主として金閨愛が務める。

はじめさまざまなメディアや同人誌が発刊されるが、近代朝鮮の詩壇掲載にとってもこれらの媒体はとても重要であった。これらの詩壇の構成メンバーも当時の日本詩壇との関係を多分に持っていた。

一九二〇年代中盤から世界各地で同時におこったプロレタリア文学運動は、朝鮮の場合、日本のそれにおける各種論争や創作方法に関する議論をどのように受け止めるかという問題として受け止められた。一例として芸術大衆化論争は朝鮮に持ち込まれたとき、内容や形式の問題よりも文盲率の高さがネックとなった。また旧プロ文学の作家らの多くは解放後、北朝鮮に渡るが、当地で政治的に粛清されたり、かたや韓国では北に渡った文学者であるという理由で長きにわたって研究自体がタブーとされたりした。八〇年代の韓国における民主化の余波でこれら旧プロ文学の作家らに関する研究が公開的に可能になったとき、その指標として参照されたのが、それまでに蓄積された日本のプロ文学研究であった。このようにプロ文学とそれに対する研究は、その当時に関する研究のみならず、メ

タレベルでの研究史的な反省が要請される。植民地朝鮮における文学創作と日本語の問題は、在日朝鮮人文学の第一世代の作家として、金史良(キム・サリヤン)や張赫宙(チャン・ヒョクチュ)の作品に対する研究が中心をなし、それらの研究に日本文学の研究者らも多大な貢献を果たしてきた。近年は、よりミクロな視点にたつて、日本語を使用することによるアドレスの変化や、あるいは東京/京城の2つの文壇空間を行き来しながら、朝鮮語と日本語を使い分けた作家らの言説形成とその政治性の問題、女流作家らの日本語創作におけるジェンダー克服と帝国への包摂の問題、帝国日本が植民地の文学や文化を「紹介」する経緯における問題点など、多岐にわたって主題が拡大しつつある。

このように日本と韓国・朝鮮の近代文学研究において、双方の研究者らが協力して解明できる課題や主題は枚挙にいとまがない。これらの問題において、これまでいくつもの業績を世に問うてきた発表者らが一堂に会し、今後の研究について展望することはきわめて意義深いものになる。また韓国文

学研究者らによるこれらのやりとりを通じて、日本近代文学の研究者らとの間に、これらの課題を解くための研究交流がいかにして可能か、その糸口や契機を見出せるような機会にもなるだろう。

(ラウンドテーブル順序)

・パネル参加者紹介(若干分)
・共通課題群に対する各発表者らによる応答(七〇分)

・発表者らに対する討論者の質疑、およびそれに対する発表者らの応答(二〇分)

・フロア参加者らによる質疑(三〇分)

計一二〇分

午後の部

旅するテキスト

——言葉とイメージの移動と変貌

ホルカ・イリナ
イン・シセキ

この三つのレベルで、テキストが「旅」をしている。本発表は、『日本の黒い霧』の最終章「謀略朝鮮戦争」を取り上げて、三つのレベルにおける「翻訳」の様子を明らかにする。これは『日本の黒い霧』を歴史ではなく、文学的テキストとして読み直す試みでもある。

古代ギリシアから現代日本へ——倉橋由美子の『反悲劇』——(カルディ・ルチャーナ)

本発表は『反悲劇』に焦点を当て、倉橋由美子の作品における古代ギリシア悲劇の改作について考察する。『反悲劇』に収録されている五篇の短小説は様々なギリシア悲劇を下敷きにしている。『白い髪の童女』はエウリピデスの『メーデーア』、『酔郷にて』はソフォクレスの『トラキーアの女たち』、『河口に死す』はソフォクレスの『コロノスのオイディプス』、『向日葵の家』と『男神がいたころの話』はアイスキュロスの『オレストイア』に関連する。ギリシア悲劇の改作によって、倉橋がどのように私小説、ギリシア悲劇、能、カフカの(不条理小説)

カルディ・ルチャーナ
パシユカ・ロマン

本パネルでは、他言語・他文化の交差点としての「翻訳」を取り上げ、日本語から外国語へ、または外国語から日本語へと、様々に変貌しながら移動するいくつかのテキストに焦点を当てる。いわゆる言語の翻訳に加えて、翻案や改作をテキストの文化と文化の間の旅の痕跡と看做し、考察の範囲に含めたい。各自の方法論の下で、原書や翻訳書を発表当時の社会的背景に関連づけて分析すること、あるいは「ジャンル」や「メディア」を翻訳行為を方向付け、テキストを形作る媒体として検討することを通して、新たな意味や表現形式を生産するプロセスとして「翻訳」の諸相を明らかにしたい。

『藤村読本』における翻訳・翻案と世界とのインターフェイスとしての文学教育(ホルカ・イリナ)

『女学雑誌』誌上の英文献訳で活躍を開始した島崎藤村は、大正期に若い読者などの異なるジャンルを結びつけ、伝統的な小説の構成を歪曲するのかわいさ」とを論じる。

想像・創造する翻訳者の役割——『東京ノート』翻訳プロセスに関する一考察(パシユカ・ロマン)

『東京ノート』は、一九九五年の発行(晩聲社)以来、英語、独語、仏語、韓国語など様々な言語に翻訳され、世界各国の舞台で公演され続けてきた平田オリザの代表的な戯曲である。

しかし、戯曲は小説などの散文と違って「生きていく」ものであり、公演、再公演の度に変容する動態的なものであると言える。そこで本発表では、日本語から外国語(ルーマニア語)へ、そして紙媒体から舞台へと、二重の「旅」をするテキストの翻訳プロセスに焦点を当てる。『東京ノート』の翻訳に携わった発表者の経験を踏まえてインターフェイスとしての翻訳者の役割や立場を再考してみたい。

者を対象に童話、小説などを発表し、その中に外遊中に触れた外国の文学・言葉・文化を翻訳や翻案の形で取り入れている。他方でこれらの作品において言語そのものにまつわる問題(標準語と方言、国語と外国語、あるいは翻訳や通訳)への言及も見られる。本発表では「少年青年諸君」のために編集された『藤村読本』に収録されている翻訳・翻案を出発点とし、同時代の国語教科書や児童雑誌等にも目を配りながら、「少年青年」にとって世界とのインターフェイスとして機能していた当時の文学(教育)のあり様を検討したい。

松本清張「謀略朝鮮戦争」から見る「翻訳」(イン・シセキ)

松本清張『日本の黒い霧』(一九六〇年)には、複数の翻訳問題が含まれている。①創作段階に使われた「翻訳資料」(日本語に訳された回想録・公式文章・新聞報道など)や、②他のメディアの伝えた不可解な事件を「朝鮮戦争下の日本」という大きな物語に書き換える翻訳、③中国における『日本の黒い霧』の翻訳、